

担い手不足の農家 就職難ブラジル人

窮状解消へ説明会

全国最大級の農業地帯、愛知県豊橋市と豊川市の農家がNPO法人と協力し、深刻化する人手不足を解消しようとブラジル人学校への「就職説明会」に乗り出した。学校側も二〇〇八年秋からの不況による就職難に困っており、「日本に残りたい子供たちのために」と期待を寄せている。



もちつきで交流する豊橋市の農家の男性者とブラジル人生徒。静岡県湖西市のエスコラ・ノバエラで

「農業って興味ある？」市のブラジル人学校「エスコラ・ノバエラ」の校長は、和気あいあいのムードで始まった。市はブラジル人学校「エスコラ・ノバエラ」もちつきで交流した後、レモンやシクラメン、茶などを作る農家の

十人と高等部の生徒ら二十人の交流は、和気あいあいのムードで始まった。交流を企画したのは、NPO法人「外国人就労支援センター」(豊橋市)。日本で学校を卒業する外国人の子供たちの就職支援の一環。十代の子らが通う同校生徒の卒業後の進路として、地域の一大産業でもある農業を考えてもらおうと、初めて開いた。

車を中心に製造業が集積する愛知県三河地方や静岡県西部は、十年以上前からブラジル人が急増。だが不況による派遣切りで多くが失業し、日本で学んだ子供たちも帰国を余儀なくされているのが実情だ。エスコラ・ノバエラのミヤモト・クラウジ校長は「昨年の卒業生も大半が就職できず、両親とブラジルに

豊橋の農家と「製造業以外でも活躍を」

帰国した。日本に残りたいという思いが強い生徒も少なくない。エスコラを打ち明け、「農業に興味を持ち、やってみたい」と思ふようになった。一方、農家も後継者不足が問題化し、豊橋市の場合、一九九〇年に約一万六千人だった農業就業人口が、二〇〇五年には約一万五百人に激減し、耕作放棄地が自立つようになった。

交流会に加わったレモン・みかん栽培の岡合浩樹さん(40)の農場では、中国から三年限定で来た研修生二人が働く。「日本人はきつい割に給料の安い農業を嫌がる。長期間日本に滞在するブラジル人なら、しっかり勉強でき、戦力になるかも」。将来、農場を拡大した時の採用も視野に入れる。外国人就労支援センターの小野田美紀代表(40)は「交流を進めていくことで、ブラジル人が製造業一辺倒ではなく、一つの就職先として農業を考えるきっかけになり、実際に活躍してもらえれば」と期待している。